

木下 直子

KINOSHITA Naoko

明海大学総合教育センター：〒279-8550 千葉県浦安市明海 8

Meikai University : naoko-k@meikai.ac.jp

Abstract: After a brief description of the acquisition processes of vowel length perception, this study attempts to explain variation in these processes with individual differences of Korean learners of Japanese as a second language. Findings demonstrated that 1) the Korean learners improved in their perception of the long-vowel over time, 2) first and second year students were unable to perceive the difference between long and short vowels. The individual differences measured by psychometric questionnaire were learning experience, motivation, learning strategies. The results may explain variation in acquisition.

キーワード 長母音, 短母音, 知覚, 個人要因, 学習動機, 学習ストラテジー, 縦断的研究

1. 背景と目的

同じ教師から授業を受け、同じ課題・練習をこなしていても学習者の到達度は異なる。これには、年齢、学習動機、学習ストラテジーなど様々な個人要因が関わっていることがわかってきている (Ellis 1994, Ehrman 他 2003, 戸田 2006)。

本研究は、日本語長母音の知覚と個人要因の関係の解明を目的とする。韓国人日本語学習者を調査対象とし、縦断的に行った調査結果を報告する。

2. 調査・分析方法

2-1. 調査対象者

2004年9月の時点で韓国釜山にある大学で日本語を専攻している1年生7名を対象とする。

2-2. 長母音知覚実験

調査語は、音節位置(語頭・語中・語末)、リズム型(111型・112型・121型・122型・211型・221型・212型・222型)、ピッチ(L型、H型、LH型、HH型、LL型、HH型)を考慮した無意味語32語で、2度聞かせて長母音が認められた箇所に、長音記号「ー」を記入する方法を用いた。

2005年1月、2005年11月、2006年11月の3

度にわたり、同様の知覚実験を行った。

2-3. 個人要因

本研究では、個人要因として年齢・学習期間・学習動機・学習ストラテジーを調査対象とする。調査には既に妥当性・信頼性が報告されている小河原(1997)の韓国語版を用いた。

個人要因の調査は、2004年11月、2006年3月の2度にわたり実施された。

2-4. 分析方法

調査語を①音節位置②リズム型③ピッチ④長短に分け、その正誤をExcelに入力し、重回帰分析により正聴率に最も関わる要因を特定する。その上で、正聴率に最も関わる要因に相関の高い個人要因を相関分析で確認する。

3. 結果と考察

3-1. 長母音知覚に関わる要因

長母音の知覚実験の結果、次のことが明らかになった(表1参照)。①すべての学習者において、3年時の正聴率が1年時より高い。②全体的に1、2年の正聴率には「長短」が最も関わっているが、3年になると変化する。

表 1 長母音知覚正聴率に関わる要因の変化

上段()内: R2 乗値 p<.05, 下段()内: 正聴率

	1 年	2 年	3 年
KL1	長短 (.630)	長短 (.446) 221(.039) 121(.023) LH(.019)	212(.048) HL(.029)
正答数	19(59.4%)	20(62.5%)	26(81.3%)
KL2	長短 (.239)	長短 (.365) 語末(.105) LL(.045) 212(.064) 112(.027)	長短 (.191) 語末(.070) LL(.050)
正答数	9(28.1%)	13(40.6%)	15(46.9%)
KL3	長短 (.519) HH(.034) 222(.022) 語中(.019)	長短 (.427) HH(.072) LL(.021)	長短 (.191) 語中(.059)
正答数	17(53.1%)	15(46.9%)	18(56.3%)
KL4	長短 (.449) HH(.028) 語末(.020)	長短 (.845)	HL(.199) LH(.025) 語末(.038)
正答数	16(50%)	29(90.6%)	25(78.1%)
KL5	長短 (.596) HL(.122)	長短 (.809) HL(.013)	HL(.221)
正答数	22(68.8%)	28(87.5%)	30(93.8%)
KL6	長短 (.804) 221(.027) HL(.010) 語中(.008)	長短 (.711) HL(.041)	測定不適當
正答数	29(84.4%)	26(81.3%)	30(93.8%)
KL7	長短 (.702) 212(.014)	長短 (.743) HL(.021)	HL(.104) LH(.052) 112(.038)
正答数	27(84.4%)	26(81.3%)	28(87.5%)

そこで「長短」の全体的な正聴率の変化をみたところ、1年～3年の順に短母音が3%→1.5%→99.1%、長母音が71.4%→77.4%→82.7%であった。つまり1,2年の時には長母音より短母音の方が困難であることが示唆される結果となった。短母音は3年になってKL1以外の全員が習得しているのに対し、長母音が全体の8割(66.7%~93.8%)にとどまっているのは興味深い。

3-2. 長母音知覚と個人要因

相関分析により、長母音知覚の正聴率に最も関わる要因「長短」に相関の高い個人要因(年齢・学習期間・学習動機・学習ストラテジー)を確認したところ、5%水準で有意に認められたものは学習期間、学習動機の「道具的動機」「発音向上意欲」であ

表 2 「長短」に関わる個人要因の相関係数

ns = non significant, ()内は調査時の学年を示す

長短 学年差	短			長		
	2-1	3-2	3-1	2-1	3-2	3-1
学習期間(1)	ns	ns	ns	-.861	ns	-.768
道具的動機(1)	-.896	ns	-.896	ns	ns	ns
道具的動機(3)	ns	ns	ns	ns	.811	ns
発音向上意欲(3)	ns	ns	ns	-.844	ns	ns

った(表 2 参照)。学習期間が長い学習者ほど、長母音の習得が進まないというマイナス相関の結果であるが、大学1年時に日本語学習を開始した学習者に対し、それより学習期間が長い KL1(21ヶ月;2004年11月時点), KL3(27ヶ月), KL6(45ヶ月)の長母音の正聴率がそれぞれ77.1%, 68.8%, 91.7%であることから、1年の時にすでにある程度長母音が聞き分けられていたためと思われる。

学習動機の「道具的動機」は、短音にマイナス相関、長音にプラス相関が確認された。「発音向上意欲」は、1,2年の間でマイナス相関が見られ、ある程度長母音を習得すると「発音向上意欲」がなくなると考えられる。

学習ストラテジーには相関の高い項目は認められなかった。

4. まとめ

本研究では縦断的に長母音の知覚実験を行い、①調査協力者が1,2年の時、正聴率には「長短」が関わっているが、3年になると要因が変化すること②「長短」の知覚には、学習期間、学習動機の「道具的動機」「発音向上意欲」が関わっていることが明らかになった。

参考文献

- Ehrman, M. E., Leaver, B. L., Oxford, R. L. (2003) 'A brief overview of individual differences in second language learning' "System" 31, 313-330.
- Ellis, R. (1994) "The Study of Second Language Acquisition" Oxford University Press, 529-560.
- 小河原義朗(1997)「外国人日本語学習者の発音学習における自己評価」『教育心理学研究』第45巻第4号, 438-448.
- 戸田貴子(2006)『第二言語における発音習得プロセスの実証的研究』平成16年度～17年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)(2), 9-17.